

秋大豆におけるカメムシ類の要防除水準

農業研究センター 農産園芸研究所 病虫部

研究のねらい

大豆の子実を加害するカメムシ類は、大豆の収量、品質を低下させる最も重要な害虫である。秋大豆に飛来するカメムシ成虫は、大豆以外の植物で繁殖し、3～5日間大豆に寄生して子実、莢の吸汁、産卵を行う。これらの活動は、開花終期から収穫期まで長期間続くため、防除適期の把握が難しく、防除困難な害虫のひとつにあげられている。カメムシ類の的確な防除を推進するため、カメムシ類の発生数と被害量との関係を調査して要防除水準を明らかにした。

研究の成果

1. 県内の大豆を加害するカメムシ類の優占種は、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ、クモヘリカメムシである。
2. カメムシの寄生密度と収量との間に密接な関係が認められ、9月上中旬加害のアオクサカメムシは着莢数と子実重を減少させ、それに加えて、9月下旬のイチモンジカメムシは子実の品質を低下させる。
3. カメムシ類の密度と減収率から5%減収の要防除水準を推定すると、20株当たり1.7～2.0頭、10%減収が3.0～4.0頭である。
4. ほ場での観察方法と防除にあたっての留意点
 - (1)カメムシ類の成虫は、夜間に飛来して莢を吸汁加害し、昼間は大豆の葉や茎の陰に隠れているので、ほ場内部の着莢部位と葉陰を重点に観察する。防除適期の9月上中旬の幼虫は1令幼虫で小さく見つけにくいので注意する。
 - (2)要防除水準以上の密度に達したら、直ちに防除を行う。薬剤の選定と使用方法については、県または地域の防除基準に準ずる。

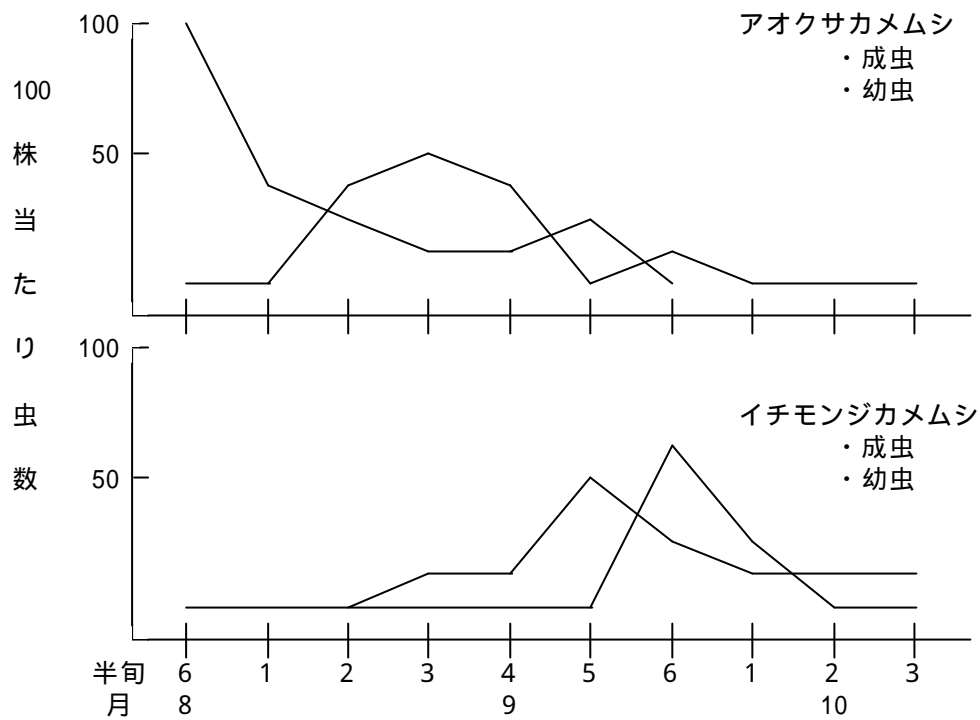


図1 無防除区におけるカメムシ類の発生(1989年)

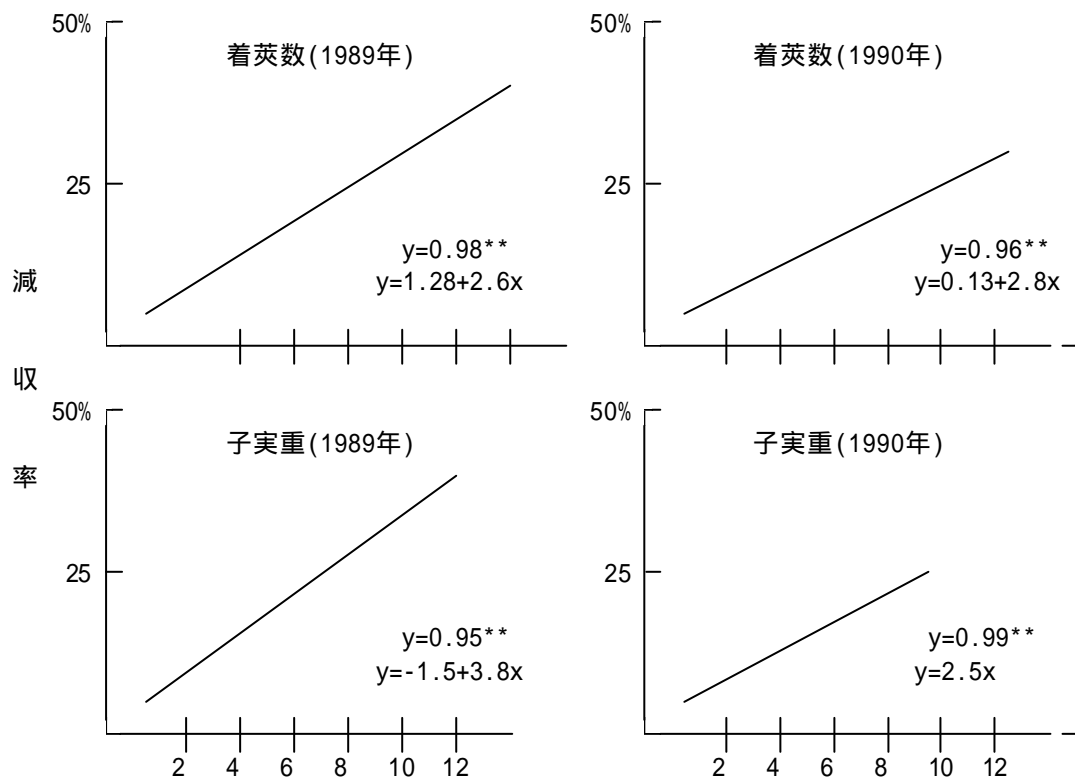


図2 20株当たりカメムシ成幼虫数カメムシ類の密度と減収率